

ロジャース・ブルーベイカーの認知的アプローチ ——その人種・エスニシティ・ネーション研究についての意義——

法政大学 佐藤成基

1. 目的

人種、エスニシティ、ネーション（以下「エスニシティ」と総称）をめぐる研究領域において、1980年代以降、広い意味で「構築主義」と呼ばれるアプローチが主流になってきた。このアプローチは、エスニシティがそれまで広く信じられてきたような客観的・本質的な実在ではなく、人々の（多くの場合不正確で誤った）認知によって「構築」されたものであることを明らかにしている。その反面で構築主義は、エスニシティがいかにか「構築」され、「現実的^{リアル}」なものとして人々をとらえ、現実の社会生活のなかで作用しているのかについて、十分に捉えきれていなかったように思われる。アメリカの社会学者ロジャース・ブルーベイカーが提唱する「認知的 (cognitive)」アプローチ（エスニシティという社会現象を人間の世界認知の次元に立って明らかにしようとするもの）は、このような側面を明らかにする概念と分析の道具を提供するものである。

本報告は、このブルーベイカーの認知的アプローチの要点を整理して紹介し、それが人種・エスニシティ・ネーション研究（この3つを一括りのテーマとして扱うことを彼は提案している）にとってどのような意義をもつものなのかを検討することを目的にする。

2. 方法

ブルーベイカーが「認知的視座」についてもっとも集中的に論じている共著論文（Brubaker et al. 2004）を主に用いながら、彼の認知的アプローチの要点を明らかにする。その上で、エスニシティやナショナリズムにかんする諸問題を扱った他の数多くの経験的研究・比較研究を参照しながら、そのアプローチの意義を考察する。

3. 結果

認知的アプローチは、エスニック集団やネーションを1つの実体と捉え、そこに利害関心や行為者性を読み込む「集団主義 (groupism)」の傾向を回避しながら、それらがあたかも集団であるかのようにとらえられている日常的な社会過程を解明しようとする。その方法の要点は、以下の3つにまとめることができる。第一に、エスニシティを人が世界を見、世界について考えるために用いる「カテゴリー」ないし「図式 (スキーマ)」であるにとらえ、それどのように構成され、どのように利用され、どのような作用を果たすのかに着目する。第二に、エスニシティがもつ集合的な共鳴性と結合性の度合い、すなわち「集団性 (groupness)」を1つの変数と捉え、それを左右する社会的・心的諸要因について考察する。第三に、認知人類学の知見を大幅にとり入れることで、差異を「自然化」してとらえる人間の認知メカニズム (L.ハーシュフェルド) を明示化し、さらにそれが社会的に感染し、波及していく「疫学的」過程 (D.スペルベル) を探ろうとする。

4. 結論

認知的アプローチは、エスニシティを集合的実体として自明視せず、それが社会的・認知的に構築されたものであるとみなす点で構築主義のアプローチと軌を一にする。その一方で、構築主義が無視あるいは軽視してきたエスニシティの「原初性」の認知的基盤を明らかにし、依然日常的に広く共有されている「当事者の原初主義」(A.スミス) を分析できる射程の広さをもっている。その意味で認知的アプローチは、「構築主義」対「原初主義」という古典的 (疑似) 対立を乗り越える1つの道を示していると言えるだろう。また、現代の先進諸国でみられるレイシズムや排外主義の広がり、ネーションなどがもつ「原初的」なカテゴリー化現象の根強さを示しているが、認知的アプローチはこのような現象を考察する際の有効な分析道具になる可能性をもつ。

【参考文献】

Brubaker, Rogers, Mara Loveman, and Peter Stamatov. 2004. "Ethnicity as Cognition", *Theory and Society* 33: 31-94 [佐藤成基ほか編訳『国境を越えるシティズンシップ ——グローバル化する世界における「帰属の政治」』(明石書店、近刊) 所収]